

元治元年

天狗争乱の傷痕

(卷一)

稲田秀男 著

序にかえて

今日の茨城県、とりわけその県民性を語る時、元治元年の名高い天狗党の乱の影響を抜きにしては考えられないといえます。多くの愛国の志士を生み、一見革新の心がみなぎつていたか
に見える明治維新の動乱期にあつて、その実水戸藩の内紛に過ぎなかつた天狗党の乱、藩士だ
けでなく、民百姓までも憎しみの渦の中に巻き込んだ内乱が人々に残した深い傷痕は、百年を
越す年月を経ても容易に消し去ることができないのでしよう。

温故知新の言葉を持ちだすまでもなく、過去を振り返り、もろもろの縁にしを尋ねることは
私達の生き方に深い示唆を与えてくれます。天狗党を教訓の地で全滅に追いやつた市川派が、
後に水戸を追われ遠く北越の地で天狗党と同じような運命を辿つたことを知る時、深い感慨を
覚えずにはいられません。

郷土史を研究する楽しさは、一片の資料、一個の遺跡から推理の糸をたどり、想像の花を咲
かせて、日常見訓れた地に昔を再現することにあります。著者稲田秀男氏は国鉄勝田電車区
の助役を勤める傍ら、全暇を利用して各所の天狗塚や寺社を訪ね歩き、まさに自分の脚で集めた
資料をもとに、見事に元治元年の勝田市周辺を再現されております。著者の努力に敬意を表す

ると同時に、このような趣味を持つことができた著者をうらやましく思います。

歴史小説はとかく話を面白くするためか、勝手な解釈を加え一方的な英雄を作り出してしま
う事がままあるようですが、著者も述べているように、歴史はその当時の人々の心になって理
解しなければなりません。今私は、この書を読みながら、竹槍を持つ元治元年の百姓になつて
いるのです。

昭和五十二年二月

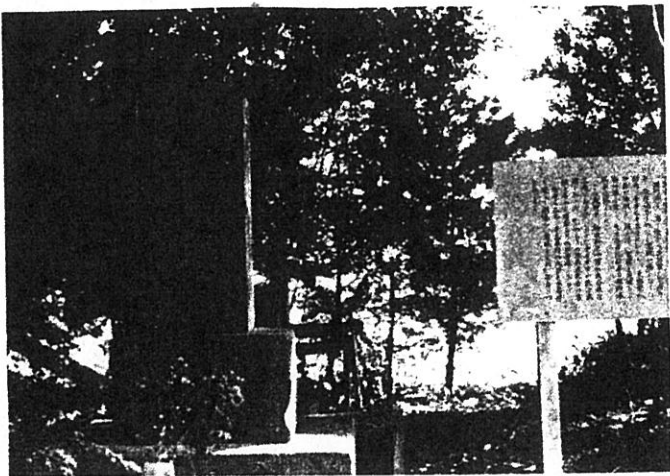
白川 保友



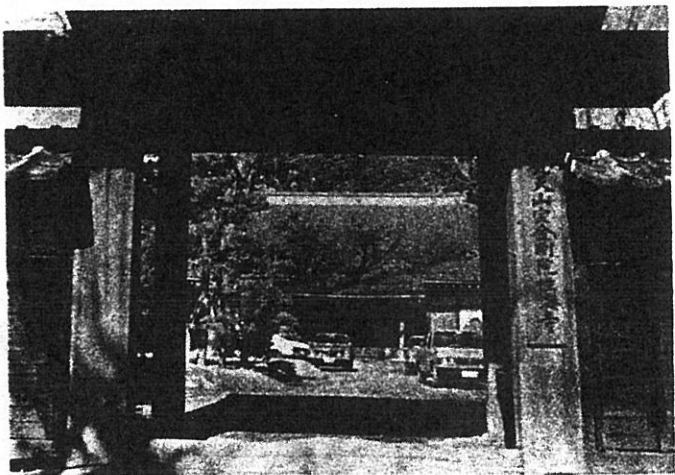
諸生党殉難者の碑
水戸市祇園寺境内



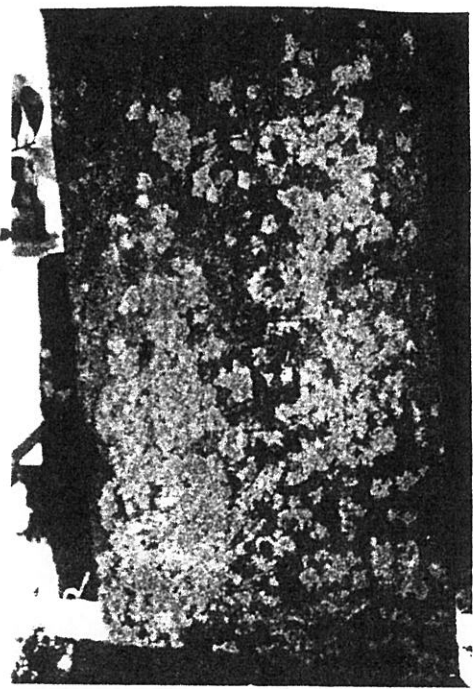
首塚
十月十日部田野合戦による
戦死者の首級を埋葬した首
塚
那珂湊市十三奉行



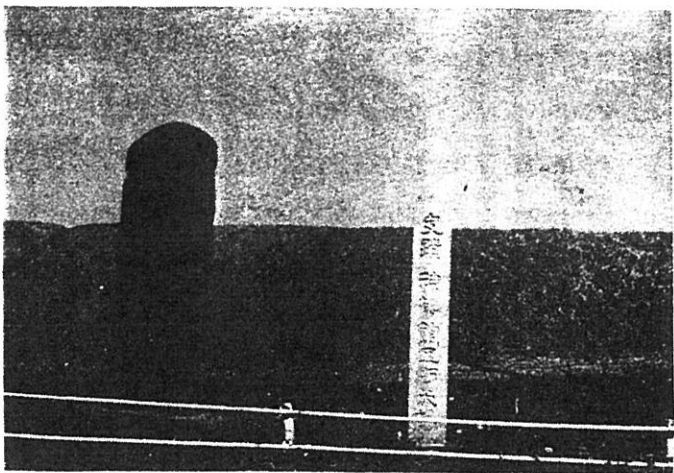
十月十日合戦時の無名戦死
の墓
邦珂湊市十三奉行地内



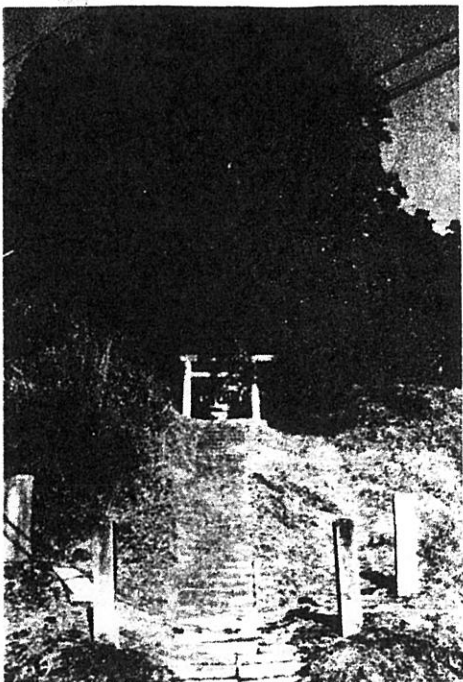
大津隊十数人が全滅した
金剛院性海寺
常陸太田市島



勝田市田彦に現存する
宇都宮藩士九人の墓

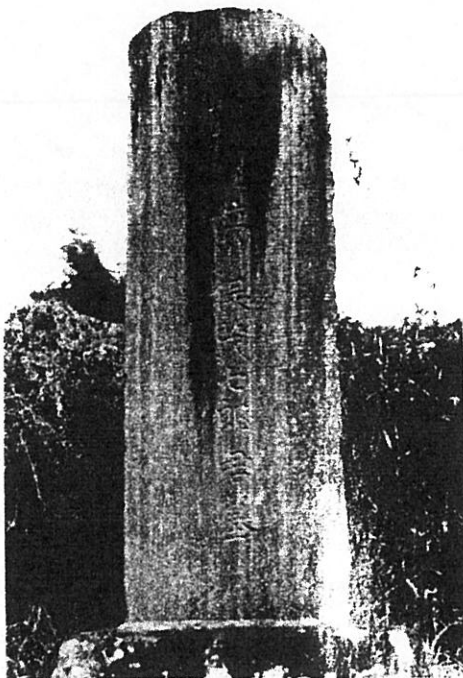


水戸藩砲術学校神勢館跡碑
水戸市若宮町



川俣隊が部隊解散を宣言し
た吉田神社

笠間市大橋

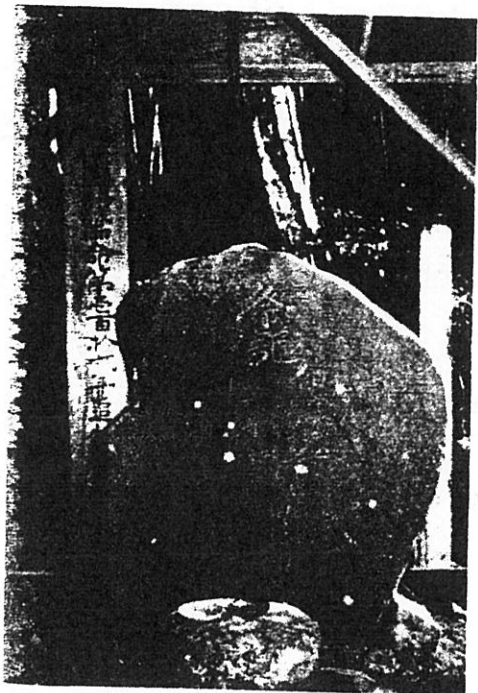


終焉の地に建立された
川俣茂七郎の碑

笠間市羽衣



常澄村塩ヶ崎長福寺に現存
する幕府追討軍戦死者の墓



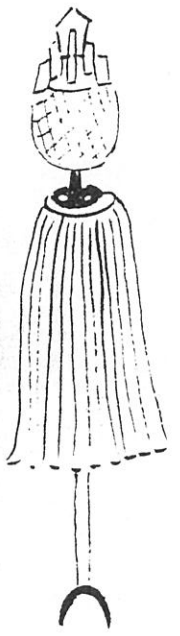
高田山の中腹に建立されて
いる伊藤益荒、伊藤齊両君
の碑

西茨城郡七会村小勝

田丸稲之石馬印 馬印



孫田小四郎 馬印



竹内百太郎 馬印



飯田軍藏 馬印



岩谷慶之助 馬印



目次

一、元治甲子県北のおさわぎ 1

二、元治元年九月九日田彦の宿 11

三、湊の海に月が出た 18

四、天狗争乱と鯉淵農兵隊の考察 22

五、波山分離隊終焉の地 32

六、西茨城郡羽衣村及び七台村高田山 32

七、酒丸村安楽寺及び栗原台天狗塚 41

一、言説参考 48

浪士領袖の馬印

元治甲子県北のおさわぎ

水戸市上市祇園寺境内に諸生派の殉難者供養の為に記念碑が昭和九年に特志家によって建立されてある。

光思無辺

明治戊辰悲徳川宗家之衰廢慷慨赴難者水戸藩士中不可数百人而
皇思洪大録宗家後焉靈亦可以瞑矣茲举其姓名録千碑背云

昭和九年甲戌秋

朝比奈知泉撰

室田義文の篆額

碑の裏面に当時の諸生派受難者の姓名が色あせてきざまれている。

テの行に、寺門登一郎の名前が見える、元治元年水戸藩挙げての争乱の資料の中に散見する
寺門農兵隊の指導者である。

波山始末、水戸野史等明治になつて発表された資料の故が、何れも寺門隊は好意的に書いた
資料は見当らない。

元治元年八月から十月にかけて諸生派家老市川三左エ門は政治性をもつた名戦術家でもあつた。
七月九日、下妻の敗戦後、陣容を立直して七月二十三日、水戸上市向井町と馬口労町口の二
手にわかれて、刀槍をひらめかしながら一つきよに城下一帯を武力で押え、諸生派政権が確立
すると同時に、檄を飛ばし領内各村の農民に思賞を口実に天狗退治の農兵隊を募集した時、県

北では寺門農兵隊、県南は鯉淵農兵隊となつて資料に表われている。

現存する故老に聞くと当時の故老からの語り伝えか、登一郎は強かつた、もとは額田の馬車引きだが、竹槍をもつて武士を相手にかかつていつたのだからと、

種々資料を検討して私なりに考察すると、額田の宿に住む血の多い農民で、たまたま争乱に乗じて、阿弥陀寺の前に住んでいたので寺門と名乗り、同類を集め市川派の民兵隊の募集に応じて歴史に現われたのが事実のようだ。

博徒、ならず者の集団であるから、天狗狩りに名をかりて各地で押借強盗を働き、農民は、彼等の徒によつて迷惑を蒙つたのが事実の様である。

寺門隊の行動範囲は太田に諸生派の部隊の本部があつたので河北三郡で乱暴した。

最近の家屋も近代風に何処も新築されて昔乍らのワラ屋根は少なくなつてはいるが、私が子供の頃天狗諸生の戦いの刀キズが今でも柱、鴨居に残つてゐる家があつた、大半は家族の中に天狗党に加わつてゐる家等を寺門隊が天狗退治を口実に乱暴したのが事実だ。

寺門隊が最も奪戦したのは、元治元年八月二十日から九月九日迄の助川城攻撃戦である。

八月二十一日 石名坂合戦

八月二十五日 金沢合戦

特に金沢合戦については、寺門登一郎の動きは抜群であつたらしく諸生党側の記録によると、八月二十六日金沢村合戦寺門登一郎立身合羽九十郎危ル事云々 とある、どのように立身したかは判らない、恐らく感状でも出してさむらいのはしくれでもなつたのだろう。

額田のきらわれ者、得意や思うべしである八月下旬、幕府追討軍、二本松藩、寺門隊が助川

城を攻撃することとなつた。

寺門隊七十八人は入四間から大雄院に進出し宮田方面に向つて陣を布いた。

大軍をもつて包囲された助川城主山野辺義芸は窮地におちいり追討軍に降伏してしまつた。

水戸藩家老山野辺義芸とは、

幕末僚原の火の如く日本の上層階級をゆさぶつた、攘夷運動に便乗して烈公の念願で常陸介川の海を一望に見渡せる場所に、天保七年から天保十二年にかけて築城された、介川城第十代の城主である。

当時城の修理を行なうにも幕府の許可を必要とした時代、格式にして一万石を誇る城が天保年間に出現したことは異例である。

いかに御三家とは云え幕府がよく許可したと思うが、当時しきりに常陸の海に異国船が現われ幕府でも海防の急務を感じてゐた。

資料によると、文政五年五月には川尻の沖で、同六年三月には河原子の沖に異国船が現われている。しかも漁民は小舟で異国船にこぎ付け当時としては珍らしい、ガラス、パン等を受取つてゐる。著者の私見であるが飲料水等を提供して交易を行なつたのもおぼろげ乍ら資料に散見できる。

当時の国際情勢を反映して禄高一万石の介川城が幕末に出現した、勿論烈公としては自分の思想に共鳴する家老を城主にしなければ多くの保守派の反対を押えて築城した介川海防城の意味がない、考察するに山野辺家老が推されたのもうなずける、いわゆる、天狗党改革派でもあり、烈公の側近でもある。元治元年七月七日！八月下旬にかけての下妻の合戦、七月二十五日

下市藤柄合戦、八月十六日―八月二十三日の湊、細谷神勢館の合戦については山ノ辺、介川城主は動かなかった。

ただ城主名代宍戸藩主松平頼徳は水戸城中に市川一派に阻まれて入城できず、仲介の労と云うか助力を要請した急使を介川城主に依頼した手紙は資料に残っている。

当時石名坂の要害に囲まれた介川城は諸生党、天狗党とも手中におさめるべく作戦を練っていたが、城主山野辺義芸が天狗、諸生何れに加担するかが注目の的であった。

再三の宍戸城主松平頼徳の要請により俺が水戸城に入城できれば両派血を見ることなく平和解決と云う気負った気持ちもあつたらう。

元治元年八月二十三日城主義芸家臣百人を従えて助川城を出て大橋、土木内、横堀、菅谷を通つて青柳に至つたが諸生に阻まれて入城できず、むなしく引上げ、石神外宿迄来たときに、天狗党分派大発勢の大津彦之充一隊と土木内地内で偶然にも出合った。

大発勢一員大津隊は北方への連絡を開かんがため先遣隊として八月二十一日那珂湊を出発し石名坂の寺門隊を撃破せんと待機した時に帰城せんとした山野辺隊と合流した。

結果的に大津隊と合同して諸生党戸祭、寺門隊と交戦し、石名坂から介川城までわずか二里の距離を四日間もかけて、かろうじて自分の居城である助川城に入城することができたが、筑波勢と共同戦線を張り那珂湊に於いて幕府追討軍と激戦中の大発勢の将校に引卒された大津隊を城中に入れたことは、諸生、幕府追討軍に助川城攻撃の口実を与えたことになつた。

歴史の流れに助川海防城は大きく遙れた。八月二十八日から山野辺義芸幕府追討軍奥州二本藩に投降したのが九月六日、城中で主だった家臣と劇的な会議が開かれた、家臣の中にも同じ

水戸藩士諸生、天狗共々に同調者は居る。

助川城が幕軍の手に入れば激戦の末に城中に入った大発勢大津彦之充は何うなる山野辺義芸の投降には強く反対したが時の流れにはいかんともなりがたい。

水戸野史に、

大津彦之充怒つて曰く

需夫ともに事を謀るに足らず。

即ち、その徒を卒き高鈴山を越え転戦島村（現太田市島）に至り闘死す。と

助川城裏の間道を通り高鈴山、入四間を一隊百数十人一団となつて太田を抜け那珂湊の同志の処に帰らんとした。

何処を通つて最後に島村に於いて戦死したか資料には不明である、百人以上の集団が行軍するのだから途中諸生及び、寺門隊に追われ追われ移動して行つたのだろうが、各村の住民が天狗狩りを市川一派が各村名主等に命じているのだから敵中を転戦して次第に兵を損じて太田市島村で全滅した。

大津隊転戦行路を湊の郷土史家関山豊正様は。

城の裏山から日立連山の主峰高鈴山（六二三米）を越え入四間の御岩神社附近に出た、入四間附近で農兵隊と小戦を繰返し笹目又は、中深萩、小菅、中染にて戦火を交え大半の兵を損じ、大津隊としての部隊は中染合戦を最後に消滅、三三、五五、士民に追われて四散したのが実際だろう、と記している。

合戦と云えば大層にきこえるが天狗を退治すればおかみから思賞にあずかると云う市川一派の政策に乗ぜられて近郷の土民が竹槍で抵抗力のない大津隊を追い廻して捕えたのが事実の様だ。

中染で解散後大津彦之充十数人は南進、久米、藤田の十文字を通り、島村ボン天山金剛院に九月十日に辿り着き潜伏している処を土民に発見、包囲され全滅した。

助川城を脱出して四日間、景北の地を血で染めて大津隊は消え去った。

考察するに湊に残った大発勢、榑原、福地等は十月二十三日幕軍に投降、古河、佐倉藩に拘禁慶応元年処刑されている。

故老の談話に額田の登一郎は強かった。

ボン天山でサムライを八人も突き殺したのだから、サムライも強かった、寺の裏山で何十人という百姓を相手に斬り合つて敗れないのだから、その中に後の垣根にかくれていた一人が突き出した槍でたおれた処を皆で突き殺した、大津某と云うサムライは、口惜しくて頭の毛が一本一本突立つたそりだ。と

元治元年九月十日の大津彦之充殺害の様子が推察できる。

水府村郷土史料に

去る子九月十日曉嶋村の金剛院に賊徒参られ、同日夕迄相潜み呉れ候様、無心の趣き、右住職より村役人へ注進これあり候に付き、村内に早速相触れ、一同まかり越し、相ね候処、太田諸生の者といつわりを申し候に付村役人の中、堀口正エ門、留三郎近寄り、応接に及び候得共挨拶に指支へ、抜みを以つて四人一統に打向われ、百姓ども覚悟すべくと申し候に付き、

前書面付の者、踏み止まり、戦争に及び必死の動きを以つて四人打首、生捕り三人、外に裏山に潜み居り候模様これあり追々近村栗原小島などより加勢これあり、五ヶ村にて山刈り致し候得共四人潜み居り内、老人打首捕り、式人逃げ去り候を、追い懸け、中野村地内にて手向い候に付き、老人打首残り一人生捕り、其の外小嶋河原にて老人生捕り、都合拾式人打首並びに生捕り仕り候分太田御殿佐治七右エ門様手元へ早速指し出し、尚更骨折り者面付太田御殿へも其節書き上置き候得共、亦々御達しに付き前書の通り面付取調べ書上奉り候 以上

慶応元年丑五月

嶋村庄屋

右記資料によると、大津彦之充一行十数人は九月十日の明方金剛院に追われ追われて、かろうじて到着、諸生の者といつわつて住職に食料でも乞うたのだろう、住職も御触れ書等によつて怪しいと思つて村役人に知らせ、村役人が来て応接の最中に、百姓覚悟しろと白刃を振上げて驚かせば退散すると思つて行動が裏目に出て半鐘が鳴つて土民に包囲され一里と離れていない、枕石寺の尊軍本部に待候していた寺門登一郎隊もかけつけ、大津隊全滅の悲劇となった。資料の二人逃げ去りは、皆川三輪吉、向坂進之介で以後山林叢沢の間を潜行し、かろうじて那珂湊に帰ることができた。

去月、小閑を得たので車で太田街道を北上久慈川を渡り見渡す限りの青田の田園地帯河合の十文字手前で左折、山田川の貧弱な木造の橋を渡り、島、ボン天山金剛院に到着した。

当時と異なり寺院も最近再建されたか新しい、住職が留守で細君が湯茶を接待してくれた。

現住職は明治以後村松の寺院から移転したので当時の大津隊のことは何も知る手がかりつか

めなかつた、大津隊十数人が戦死した場所は寺院のどの辺だろうか。

寺院自体が小高い丘の中腹に建立されたうえ更に裏が又高くなつて頂上に御稻荷さんらしいホコラが有る、頂上から見渡せば、旧島村の田園地帯が一望に見え、遠方に久米、藤田の十文字も見える。

私見ですが、村役人を先頭に島、栗原の竹槍をもつた村民と後からかけつけた寺門隊に十重、二十重に囲まれ、寺院の裏山の道に追いつげられて万策つきよつて、たかつて惨殺されたのが真相ではなからうか。

河北三郡に亘つて暴威を振つた寺門登一郎隊を指したと思われる資料に

九月八日竹槍などをもつた徒党二十人、又は三十人位横行、亦も要所に自身番致し候処、其の番所に賊参り富家へ案内致させ、もしその戸をあけざる時は、外より打こわし入候て金子などを奪い去り候、多分寺門勢なる由内聞有之候。

押込強盗が警官を強迫して金持の家に案内させて表戸をたたきこわして侵入し金子をうばえ去ると云うのである。

末尾に多分寺門勢なる由とある、額田三郷から発生した寺門農兵隊の中には可成いかわしい人間も居たことは事実の様だ。

幕末水戸藩で一番の被害者は誰だろうか、勿論天狗諸生、両派の犠牲者は枚挙にいとまがない程多人数であるが、彼等には当時の時代を背景とした誇りと云うか、使命感があつた。

一般諸民は何うか六公四民の水戸藩で重税に苦められ、生きることが精一パイの民衆は、わけて戦乱の地となつた、下妻、湊、日立地方は哀れである。

尊皇攘夷と唱えたからとて生活が楽になるわけではないし第一尊皇攘夷の意味すら一般民衆は何のことか不明の者が多いだろう、民衆の支持を得ないで革命が成功しないのは古今東在同じである。戦前迄の故老は湊地方では天狗諸生の争乱を、子年のおさわぎと言つてゐる、フランス革命、ロシア革命の様に一般民衆密着した争乱ではなく、雲の上の争乱に心ならずも巻き込まれて、民衆が泣いたのではなからうか。

諸生党市川政権が樹立され吾が世の春を欧歌したのが何年か。

元治元年十月二十三日湊の重囲を脱出総数八百余人長旅西上の途についた、一步一步、敦賀の悲劇に向つていつたわけである。

慶応三年將軍徳川慶喜大政奉還、明治元年一月六日鳥羽伏見の戦い、二月七日市川一派江戸藩邸を追われ水戸に帰り、三月十日市川一派百五六十人会津に向う五年そこそこで市川政権は消えた。

天狗党政権成るや、寺門登一郎は。

此者儀先年結城寅寿の徒に党与致し候に付嚴重仰付けられ様も之あると雖も、其初寛大の御沙汰之あり候処、其後悔悟の廉も之なく、去る子年大炊頭様御下向の節御入城を支え奉り候のみならず、種々奸悪の所業之あり、御政体を相防ぎ、剩へ天朝御宗家より度々御出され御御改正の御沙汰を拒み奉り、市川三左エ門等へ同意いたし奸民をも多数召集致し、助川城を政略其他容易ならざる所業之あり、旁々以つて重々不屈至極大胆の致し方はつき後來の誠として上下町引渡の上、元居村に於て磔申付るもの也
但し所持の品欠所

勝てば官軍、敗ければ賊軍か
水戸城下、上市下市引廻しの後額田の久慈川河原舟付で処刑された。
前記祇園寺諸生党殉難者に名前は見えるが、私も旧額田村の墓地を探したが墓石は見当らな
かった、若しお判りの方は御一報下されれば幸いである。

元治元年九月九日 田彦の宿

勝田市田彦の共同墓地、中卵塔の一角に野洲宇都宮戸田越前守家臣九名の墓地が百年の風雪に耐え、碑文も色あせて建立されている。

碑文曰く、九名の戦死者の氏名の脇に、「右九人の者為我戸田家臣去年の秋候事、幕命出征干常洲也此興行、九月九日戦死」云々と標記してある。

今を去る百有余年前、元治元年（一八六四）といえは、明治維新（一八六七）の四年前である。

徳川幕府親藩の一つである、常洲水戸藩は藩論が二つに別れて大きく揺れていた。

その年三月二十七日、常洲南関東の一角筑波山に於いて尊皇攘夷を旗印に藤田東湖の一子、小四郎一派の拳兵、七月七日幕府追討軍との下妻の合戦、八月十日水戸城に入城すんとする城主目代宍戸一万石城主、松平大炊頭一行と筑波勢が入城を阻止せんとする市川派の藤柄合戦、八月二十三日の細谷神勢館合戦、以下天狗党は祝町、那珂湊の諸生党を撃破して九月に峯山に筑波勢の本陣が設けられた。

吉田、湊、部田野、のみならず戦火は那珂川を越えて久慈川沿岸にも及んで一般民衆の上に火の粉が飛んできた。

当時一般庶民は、たとえ飢饉にあうとも戦乱には遭遇しないことを願った。

勤皇も佐幕も、尊皇も攘夷もない、六公四民の重税に追い立てられてその日の生活をささえるだけが精一ぱいで生きている状態である。

一般庶民は天狗、諸生何れに協力するかと言ったら、ためらうことなく、時の権力者である諸生党に、助郷、その他の便宜をはかったばかりでなく、積極的に天狗狩りに参加したことだろう、資料に残る鯉淵農兵隊、又は額田の寺門農兵隊となつて表われている。

又そうしたなければ日常生活が、家族の安全が保たれなかつた。

天狗党関係者の経歴を武士を除いてみると神宮、郷土の多いのが目につく、生活が或る程度恵まれた故に、幕末僚原の火の如く燃え上つた尊皇攘夷の時の流れについてゆけたのではなからうか。

さしずめ現代ならば又マスコミに尊皇攘夷と唱えていれば三度の飯を心配なく喰い、貧困のために可愛い娘を女郎に売り、此の世に生れてきた子供を間引かないで済むかと書かれるだろう。

諸国から参加した天狗の中には、乱世の風雲に乗じて、一獲千金を夢見る無頼の徒も多数いたことは事実のようである。

常洲、野洲にかけて暴行、略奪の記録がその一つであろう。

元治元年六月六日野洲栃木市の大半を焼失した、いわゆる原蔵火事も、もとはといえば天狗党幹部、田中原蔵が土地の富豪に軍用金の調達を断られた仕返しに放火したのが原因である。

現在でも土浦近在のある老人は私の先祖は天狗に軍資金として家財を強奪されて財産を失なつてしまつたとはつきり明言している。

藩という背景をもたない千人以上の集団が戦斗体系で行動するには一般篤志資金によつて筑波天狗党は部隊をまかなう以外に手段がなかつたであろう。

このことが以後の天狗党の行動が一般庶民の反感を買い、大きな制約となり運命を左右することとなり越前敦賀における史上例を見ない悲劇の素因となつたともいえる。

元治元年十月二十三日、大発勢、榊原、谷、富田、福地の幕府追討軍に降伏の事態に湊抗戦の意を失ない、未明重囲を突破し、平磯の本営を出発、酒出、瓜連、大宮、大子、栃木、群馬と北陸道へすすみ、途中幕命により抵抗する藩を武力で排除しながら越前、新保宿についた一行は深雪の中でついに万策につきて幕軍に降つた。

彼らが頼りにした一橋慶喜は、そして時の水戸藩主慶篤は、天狗党の最期をどう見ていたのか。

慶喜曰く、「攘夷とか何とかいろいろいふけれども、その実は党派の争いなんだ……。幕府の方に手向つて戦争をしたのだ。その廉でまかつたく罪なしといわれぬ……。私の身の上がなかなか危い身の上であつた。それで何分にも、武田のことをはじめ口を出せわけにいぬ事情があつたので加洲はじめそれぞれ預けて、後の処置は関東の方で遊ばせというので引き上げたのだ」、(昔夢会筆記―徳川慶喜回想談)、とのちに語っている。

また時の水戸藩主慶篤は、「御仕置御付けられ、拙者においてこの上なく安心致し申候」と弟川越藩主松平大和守に手紙を書き送っている。

天狗党一同まさに哀れとしかいいようがない。

私は去る四十七年八月長い間の念願である敦賀市の松原神社に参拝する機会を得た。そこで

はからずも地元の篤志家による出版物で、当時の天狗党の一員が書きのこした陣中日誌の復刻本を手に入れることができた記録者の氏名は不明である。

内容については三月の筑波の旗上げ以来こく明に記してあるが、そのなかから郷土に關係する、元治元年九月六日から、九月九日の部分をつぎに掲げてみよう。

陣中日誌（原書のまま）

日出度叶

「元治元年九月三日波山勢、五百人斗り村松えくり込、七日石神之押出、石川村ニテ土兵百人斗りかためありし、たちまちおいはらい候是より米崎村、是にも百人斗りかため有、是は時のこゑをあげたに、おどろきみなにげさりける。是より向山えくり込、身方ミナ勢そろへ也

額田ニて五百人斗いかためあり、ただ老戦ニせめくずし、みな引上休息致、其夜五ツ時源勢押来り大砲ヲ打、閩のこゑヲ上、夜中大さわぎいたすヲかまわず、かためきびしく致シける也。八日明六ツ時、先手すすみ掛る、相手大砲を打かけたたかう也、身方うら手にまわりせめ出、てききニおどろきうるたへる、無二無三きりたヲしける。九ツ時迄にみなみなおいはるふ、大砲玉薬小荷駄分捕致し、敵百人斗切ころし候。此時身方かち時上、みなみな引上げる。

九日先手三百人程くり出、田彦にてかため宇都宮勢千三百人程かためあり、是を一戦にせめおとす也。大砲四丁玉薬五駄斗、まく武拾はり、敵百人程切たをす。ミな一どにかち時を上げ、平磯に引上げ休息致す也」

以上の陣中日誌から推量すると、天狗党の一部隊、藤田小四郎を隊長として、林五郎三郎、飯田軍蔵等が九月六日、平磯の本営を出発、敵を求めて、現東海村、村松、石川、向山、現那

珂町、額田、現勝田市、田彦と遊撃戦を展開、戦線を移動して行つたことがわかる。

横瀬夜雨著、天狗騒ぎに

九月書九つ頃（現十二時）田彦戦ひ戸田勢後をとり、十一人即死天狗十人余死亡有之田彦村佐次右衛門方に戸田家来三人死。

と誌されている。

現在は道路が整備されているが昔は細い砂利道であつた、百人以上の武装集団が移動してゆくのだから民衆は山林にでも身をかくしただだ去つてゆくのを待つばかりであつたと思われる、古老の話に、天狗様が通るので親に連れられて裏の竹山に逃れていた、と聞くがたぶんこの時ではなかつたらうか。

古老の話では、元治元年という年は秋になつてから雨が多く旧九月といえは現在の十月、秋の獲り入れの最中である、天狗が石川、額田に来たというので雨の中を家族を連れて、勿論家財道具を放り出して、田彦の宿場には役人が居るから安全だと思つて宿場の入口まで来ると家が砲火によつて燃えている、田彦に天狗が攻めてきたというので後台が安全だと思つて、田んぼの中道を通つて早戸川を渡ろうとしたが、連日の豪雨で増水、子供を肩車にして勝手知つたる浅瀬を胸迄水につかつてやつと五台の宿に入つて安心したという話しを祖父からよくきかされたものであつた。

幕府は常野浮浪の徒を鎮撫するため関東、東北各藩に出動命令を下した、幕威年毎に衰えたといえ、一番で出兵を拒否するだけの力はない。

天狗党追討に奸賊と叫んで戦意を燃していたのは皮肉にも同じ水戸藩の諸生党である、幕命

9~10月 湊附近幕府追討軍布陣圖



により出兵した諸藩の兵には水戸藩の内紛に血を流して馬鹿らしい気持が支配しているから戦意が盛り上らないのは当然である、できることなら出陣だけで幕府への面子を立て兵を損せず、冬も間近か、早く帰藩したい気持であつたらう。

史料によれば、野洲宇都宮、戸田越前守、七万七千八百石、総数七百人、当時水戸城を中心に分散駐屯していたことが判明している。

またある史料によれば、

「九月八日公辺の御人数北条新太郎様歩兵頭にて勝倉の御宿陣其の数凡そ貳千人、その混雑言語に演じ難く候」、と記録されている。

一部宇都宮藩兵が水戸城下から枝川の渡しを越えて田彦に分宿した、勿論村役人、有志一同宿場を守るために協力したことはうなずける。

当時の宇都宮藩兵が滞陣したのは土地の有力者某家であるときいているが史料に残っているのは当主の名前が佐次右衛門であるということだけである、ただ前にのべた共同墓地の近くであるということにはうなずける。

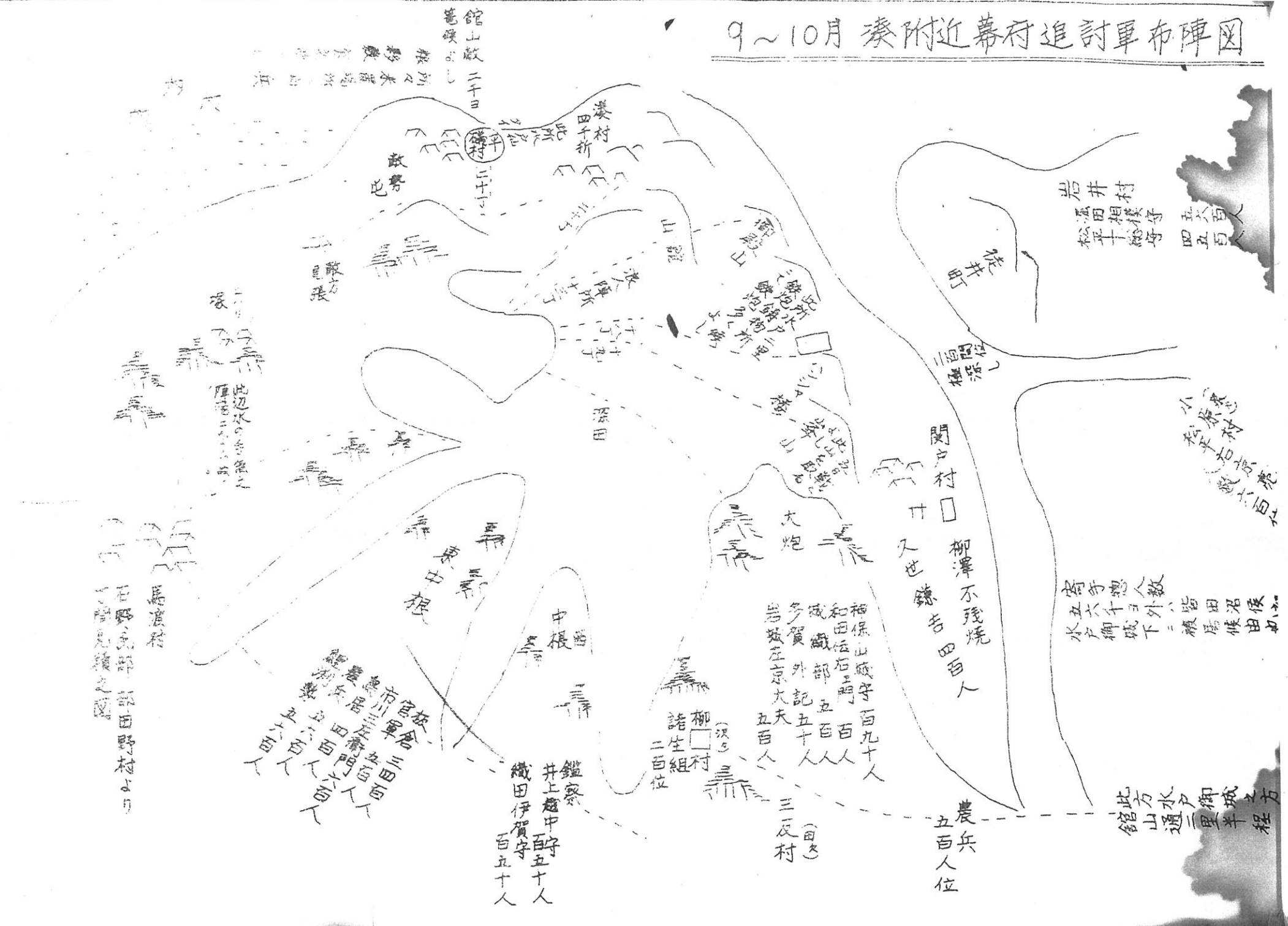
連戦各藩の兵を撃破し、幕府連合軍三万に湊の一角に追いつめられ更に太平洋の海上には幕府の蒸気船が砲門を開き、出るも入るも敵ばかりの天狗党は決死の覚悟で戦意に燃えていた、結局宇都宮藩兵も田彦の戦いで九人の戦死者出して敗走した。

天狗が勝どきをあげて去つたあと地元の人々が藩兵の遺がい共同墓地に手厚く葬つてその壘をなぐさめた。

十月二十三日、大発勢の降服により天狗党は湊の陣をひきはらい西上の途についた。

9~10月 湊附近幕府追討軍布陣図

盟をなくさめた
十月二十三日、大発勢の降服により天狗党は湊の陣をひきはらい西上の途についた。



ようやく郷土に冬の訪れとともに平和がやってきた、水戸藩も短かい期間ではあるが、市川三左エ門一派の諸生党の天下となつた。

一旦帰藩した宇都宮藩兵が悲しい想ひ出の地田彦を訪れ、慶応元年十月に墓標を建立したのである。

戦争とは何と悲情なものか、見知らぬ他人同志が刃を向けて殺しあわなければならぬとは。年毎に市内も開発の波がおしよせて急速に変化してゆく、百年前の田彦あたりも再現する、すべもない、つわもの共の夢のあとほうたかたの如く消えてゆく。

歴史は当時の人々の気持になつて考察しなければならぬだろうが、常澄塩ヶ崎長福寺、湊館山浄光寺、同華蔵院、栗崎六反田地蔵寺の各処には、天狗諸生受難者の墓が散在する、痛ましくも悲しい記録は後世に何を教え、何を残してくれたか。

主命により家族をあとにして異郷の地田彦で歿した宇都宮藩士の子孫が墓参をしたという話しもきかない、こけむした一個の墓石を見ながら拙稿を誌す次第である。

昭和五十年 九月

湊の海に月が出た

私の家系中に私の代から、さかのぼって、五代前に義助と言う先祖が居た、商人肌の人物で亡くなった祖母の話しては農業の片手間に附近の農家を廻って農産物の仲買等を手広く行なつて相当な財産を残したと言う、明治三十年代に死亡している。

私の家では代々旧二十三日には水戸市松本町にある谷中の柱叡寺の二十三夜尊の縁日に必ず参詣に一日がかりで出掛けた。

二十三夜尊詣りに毎月行つて帰つて二十キロ、自転車を購入できる以前は徒歩で、福田、那珂町五台、木ノ倉を通つて千歳橋が完成する前は中河内の那珂川を渡船で対岸の水戸市に着岸参詣して帰路は屋台店をのぞいて左党は酒の二三本も寄り付けの店で飲んで好い気持で子供等に土産でも買つて家路に着くと優に一日は費消したろう。

義助の言い伝えなのだが、私は二十三夜尊の御陰で、昔湊の天狗に殺されるのを助かつたのだから代々旧二十三日は欠けることなく、二十三夜尊に参詣してくれと遺言して故人となつた。現在でも祖母は二十三夜尊は毎月参詣に行く。

湊の天狗に殺される処を助かつたと言うが詳細は私も不明で居たが、最近八十四才の隣の人に教えていただいたので概念だけは判明したので、何等かの参考になればと思つて筆をとつた次第です。

湊に天狗が居たのは元治元年八月十六日から十月二十三日迄の二ヶ月余である。

この期間に吾が先祖義助が湊で天狗党と何らかの接触があつたことはうなずける。老人の話を総合して愚考するに、

義助が農産物の仲買人として馬渡村（現勝田市）から十三奉行（現那珂湊市）の附近の農家で商売の取引して帰路に着く時に、天狗の見張の者に怪しまれて捕えられて湊の海岸口の土蔵の中に押込められた。

資料によると、当時天狗連黨の中で平磯口、部田野口を準備していたのは筑波軍の中でも最強の精鋭七〇〇余人、藤田小四郎、飯田軍蔵の一隊であつた、前戦の網にかつた義助は戦で気が立っている彼等にとつて地元民と見えなかつたのも無理はない。

敵の間者として大発勢神原新左衛門、三木左太夫が守備している本営に連れて行かれ、種々尋問されたが、いかにせん稲田村の百姓義助にとつて何とも答え様がない、べいべいはえつくばつて助けてくれと言う外はなかつたろう、土蔵の中に押込められたと言うから網元の土蔵でも戦火に幸いに焼け残つてあつたのだろう。

見張の連中が酒を飲んで騒いでいる話を義助がきいていると、明日は出陣だ、軍陣の血祭りに明朝は此奴を一刀のもとに斬つて戦線に向うのだと騒いでいるのが義助の耳に入った。

八月から十月の期間で二十三日を資料により愚考してみると。

八月二十三日は、水戸藩主目代、赤戸藩（一万石）松平頼徳は、諸生党市川一派に妨げられて水戸城に入城できず湊に滞陣してゐる頼徳は再度入城すべく部隊を編成して八月二十日に湊を出発、枝川（勝田市）で那珂川を渡河、城東、神勢館に到着、八月二十二、二十三日の下市

地区を戦場に神勢館のたたかいが激烈に行なわれた。此の期間には天狗党の最強部隊の一部を湊に残して藤田、岩谷、飯田等は郷校小川館に滞陣していた。

九月の二十三日から二十二日にかけての湊一帯の戦線は如何か。

九月に入ると幕府追討軍参万の大軍は湊の以南を佐倉、棚倉、高崎の各藩が陣容を立てて戦線を整備されていた。

一方那珂川以北は、中根口、部田野口には北条新太郎の指揮する幕府の歩兵隊が、水藩の市川三左衛門隊の側面から迂回させ前浜から平磯に向つて進撃していた。

十月二十二日は天狗と共に心ならずも時の勢いか武器をとつて戦つた大発勢、榊原、谷、富田、福地等が幕軍に降伏、万策つきた天狗党八百余人は二十三日早朝に湊を後に西上の途に出発している。

十月二十三日を境に湊近辺に漸やく平和が訪れてきた日である。

以上八月、九月、十月の二十二日から二十三日にかけて、稲田村の百姓儀助が湊近辺を商売のためとは言え戦乱の中を歩いて居たとはいへない、ただ八月の下旬は比較的、湊以西と以北が天狗、追討軍共に警戒が手薄であつたことは、九月六日に天狗党の一部が湊を出発村松、高野、向山寺を通つて額田、河合の二本松勢と交戦している。

又九月八日には天狗党の中でも左派的存在の田中原蔵の一隊は助川城を攻略北方への通を開く目的で湊を出発村松に宿陣している。

以上考察するに

儀助が天狗に捕つた八月二十二日、場所は馬渡も北寄り長砂辺か或は村松の宿近くで商売を

していて前記附近に偵察に来た天狗の一隊に怪しい奴と疑われて湊の陣営に引立られたのか。はじめに記した明日は合戦だからと天狗が言つたのは八月二十一、二十二、二十三日の大発勢を軸とした、細谷神勢館の合戦を指したのではなからうか。

戦火で焼け残つた土蔵だから儀助は脱出することは容易であつたらうが表に見張つている天狗が恐ろしくて土蔵から出られず、旧八月も下旬日が短かくなつて日が暮れた。表で見張つていた天狗も眠つてしまった。

今だと夢中で表に出たが稲田に帰るのには月が出ないので方向が判らない、十三奉行の辺りの山林に手さぐりであろうやくたどり着いた海岸を背にして歩けば稲田に着くのは判るがその海岸が判らない、やがて時間が巡つてはるか東の彼方海上に二十三夜の月が上つてきた、そうだが今晩は二十三日だ稲田は西だ、夢中で山林の中を手さぐりで走つた、馬渡、足崎、高野を抜けて吾が家についた。

二十三夜の月があつた時に海岸に出なかつたら又天狗に捕つたかも知れず、後年儀助が二十三夜の月に俺は助けられて命が助かつたのだと家人に話したのもうなずける。

ただ儀助は非常に酒が好きで細君はしまつた女だと言うから家に居ては細君がうるさくて多くは飲めず、毎月二十三日を楽しみにして水戸に出掛けて、信心と帰りに居酒屋で一パイ飲むのを楽しみにしていたのかも知れない。

天狗争乱と鯉淵農兵隊の考察

水戸藩、幕末天狗党の乱の諸資料の中に鯉淵農兵隊の名が散見するのは、元治元年七月二十五日から十月末日までである。

慶応元年乙丑五月

賊徒追討軍戦場日記書上帳、鯉淵村

の一部に、

元治元年甲子七月二十五日村方へ長岡駅詰申来るにつき、早速前田村迄参り候ところ、その節賊徒水府御城内へ攻め入らんとの様子承り候につき前田村より引返り其夜正坊山集合の上賊徒追討決心仕り候

翌日村方庄屋山田惣五郎本陣と致し日々敵重見張致し追々四十五ヶ村組頭へ其勢人数式千六百余人也、

即ち右人数軍中日々請仕り候、前尋軍の節は西渡まで請仕り候、

資料では、

七月二十八日から八月朔日にかけて天狗党本隊に合流せんとして、野口の郷校を出発した勇猛田中原蔵隊を鯉淵村地内でなく積極的に飯島村附近に出動して攻撃している。

二十九日には鯉淵勢に進路を妨害されて迂回し、小川方面に出ようとした田中隊を土師、住吉方面に追撃して以後の田中隊の行動に大きな制約をしている。

八月二十九日土師、住吉両村の焼失は此の時の戦斗である。この中、土師村の一角が山賊の以後の鯉淵勢は、単に村の自警団の組織ではなく明らかに諸生党の一戦斗部隊として各地で天狗党と抗戦している。

水戸野史に曰く、

七月二十九日田中原蔵ら三百余人水戸を発し鯉淵を過ぐ農民数百人竹槍をたざさい火を放ち田中勢を囲みてこれを討たしむ。これを鯉淵竹槍隊と号す、これより諸村鯉淵勢にならい、竹槍を製して竹槍組と称す。其徒無頼諸郷に横行し土豪及び藤田、武田等に与せる者の家をこわし財を掠すむ。

鯉淵勢市川等に従い善く戦い頗るぎよう勇あり。……

其の後鯉淵勢は

一、八月十四日 小鶴村近傍の合戦

注 八月の時点で天狗党田丸、藤田の本隊は府中、小川、潮来等に分散待機していて、進んで銚子より水路横浜に出て攘夷決行か、その前に水戸城に入城して市川一派の奸徒を討伐して、しかるのちに攘夷決行と党論が二ツ分れている時である、小鶴から、鹿島の海岸近く迄市川諸生党の指示により、天狗本隊けん制の作戦行動に従事したものと思われる。

二、八月二十四日、草笠口、馬口労口、金町口、环渡船場口、などの水戸城防衛

注 水戸藩主慶篤公目代として常陸宍戸一万石、松平頼徳江戸より水戸街道を下向、水戸城に入城せんとしたが市川一派に阻止されて果せず、八月十日、一旦那珂湊に待機、再度入城せんと、八月二十日から二十三日にかけて細谷村神勢館を基地として両派の激戦が下市を舞台に展開された期間である、鯉淵農兵隊は水戸市内の要所要所の警戒に狩り出された記録である。

三 八月二十九日 堅倉宿追討

注 資料より考察すると、天狗が筑波山を下りたのが七月下旬、府中、小川、玉造、潮来等に分散駐留していた。一部は、現美野里村、竹原中郷の逢葉山薬師院、永福寺に宿陣していたが、八月三十一日鯉淵勢の来攻により撤退し那珂湊方面に移動して行つたことが記されている、単に鯉淵村近村四十五ヶ村を守備するだけでなく、近在に押寄せる天狗に積極的に水戸街道を南上して攻撃する行動にでている、たまたま幕命で出兵して府中方面を警備していた、奥州棚倉松平周防守の一隊と合流して以後は棚倉藩兵と行動を共にしている。

四 九月十日〜十一日 友部、宍戸附近の天狗党山狩

注 九月五日、鹿島、大船津の一戦に敗れて逃散する、天狗党の中でも分離派の一行を山狩りで捕殺した鯉淵勢の動員である。

結城郡菅谷出身の天狗党の幹部、大砲隊長兼武器奉行である、大久保七郎左エ門が大船津を撤退、幕兵及び鯉淵勢に追われて連日の雨の中、前後左右に追撃する農兵は追えども追跡してはなれず途中西岡、宇都宮、伊藤、川俣と宍戸附近で見失ない、一人で現友部町、矢ノ下部落迄やつと辿りついたが依然として鯉淵農兵は人数を増すばかり、ようよう矢ノ下八幡神社の森裏手にあるまぐろ山に入り迫る鯉淵農兵を前にして従容として自決した、時、年六十四才

筆者は地元の友人に案内されて去年の暮やつと尋ねて矢ノ下部落に入り神前に立つて當時を偲ぶ、老人に語り伝えでもあるかと尋ねたが皆自判らなかつた、ただ後の小高い山が、まぐろ山と言っていることだけは判明した。

五 九月二十一日、二十九日 平磯、中根

注 天狗争乱の戦線は最終的に那珂湊に移動していった、現、勝田市中根に幕府追討軍本陣が設けられた、幕軍総数二万八千、鯉淵勢は棚倉藩の指揮下に入り、九月二十五日平磯台、十月十日部田野原合戦に棚倉藩の先陣で参加している、自軍の兵は二陣に温存して危険の多い第一戦の先陣に素人の農兵隊を押し出したのだから棚倉藩六万四百石も考えたものだ。

部田野原十月十日の合戦には鯉淵勢参加六百人北条新太郎より拝領の赤半天二百人、黄半天二百人、手槍四百本、飛口、大工ノミ、樋屋銃、七尺の棒すげ、大旗二本、大砲一丁、馬二十二匹、ホラに合わせてくり出す、と記されている。

鯉淵勢の戦傷者

薄手 治左衛門、清介

討死 栄介

現那珂湊十三奉行の地内に敵味方の戦死者を埋葬した首塚が県道の脇に現存している、十月二十三日天狗党が那珂湊の重囲を脱出して西上の途につく迄鯉淵勢は存陣していた。

戦乱で犠牲となるのは古今東西の例を引くまでもなく土地の農民である、三月から筑波挙兵以来の筑波地方の天狗党による軍資金の強奪、火災、兵の乱暴等の噂はいち早く鯉淵地方にも伝わって迫りくる戦乱に対しては敏感であった、当時の農民は生きると言うギリギリの状態を維持してゆくの精一ぱいであった、いや生きるそのこと事態を支えることができなかつた。当時の水戸藩の人口が男子に比して女子が極端に少ないことが目につく農民は生れてくる子供を育てる余裕がなく、又育てても生産能力の少ない女子は「間引」をせざるを得なかつた。当時の鯉淵村に限らず農村の極貧状態に加えて封建制度における農村の支配機構を考えてみる必要がある。

世帯見習録に見ることのできる当時の農村の組織を分類してみると、地方三役といわれる名主、組頭、言性代、その下に属する小作言性、水呑言性などに大別されるが、さらに細かく分けられ、階級順に差別されたのである。判り易く分類すると、

大庄屋（おおじょうや）

代官、郡代、郡奉行ら地方役人の指揮下にあつて、地域行政にあたる村役人の最上位で十数

ヶ村の名主、庄屋を支配した者のこと、地方によつては大肝煎とも言われた。

名主（なぬし）

村役人の長で村政、自治一般を司つたが、江戸の初期には代官が由緒ある者を任命して世襲としたが、中期以降は一代限りとし選挙で決めるようにした。資料によると鯉淵村は代々世襲のようである。

組頭（くみがしら）

村役人の一つで名主、庄屋の下役であつたが、読み書きそろばんが達者であり、さらに石高も相応に持つていて、村の自治の用に立つことが条件とされていた。別に年寄、長言性とも言われた。

百性代（ひやくしょうだい）

百性の総代のこと、名主、組頭による村政自治の運営に、村民の代表として選ばれた者で年貢、村費の割り当ての相談その他に参与した。

小前（こまゐり）

小前百性といわれる小耕農民だが、田畑屋敷を持ち、年貢を負担する本百性で、村では中堅であつたが、貧乏百性の代名詞になつている。

本百性（ほんびやくしょう）

検地帳に記載され、田畑、屋敷、及び用水権、入会権等の百性株を持つ村の構成員で、村に割当てられた年貢、その他諸役の負担者で、高持百性ともいわれた。

小作（こさく）

田畑をもたぬ農民が、地主から田畑を借りて耕作し、小作料（地代として現物で納める）を納めるもので、一般に貧農の隷属階級農民はこうした位置に甘んじなければならなかった。

抱百性（かかえびやくしょう）

村内における隷属農民で、本百性である「抱親」に、労働力を提供することで、生活を維持した、村政に発言権がなく、年貢も直接に負担しなかった。

家抱（けほう）

本百性と従属関係を結ぶことによつて、生計を立てる百性で、門屋、門人、その他いろいろの呼び名があつた。

名子（なご）

下人、家抱、被官などと呼ばれたものと同じで、本百性のもとに従属し、農業をやり、地主の耕作にも労力奉仕をした、近代では作男ともいわれた。

分付百性（ぶんづけひやくしょう）

検知帳に名前は記載されるが、土地の所有者でなく、単なる地主の耕作者で、自立できない小農民で、公式に百性と認められなかった。

水呑百性（みずのみびやくしょう）

文字通り、粥さえすることができず、水を呑んで暮すほどの貧乏百性のことで検知帳に記載されず、田畑を持たぬ無高の最下層の農民のことである。

以上の如く蔽として極貧の生活の階級制度のワクの中で下層農民はギリギリの生き方をして

いた、村の上部階級の指示には盲目的に竹槍をもつて相手が何であれ向つていったことはうなずける。

天狗争乱の丁度二年前に、内原の歴史によると、文久二年正月庄屋、村役人の不正による村方騒動が発生している。村民多数が郡方役所に、「強訴」して善処方を要望したが根本的には解決にならなかつたようである。

二年後に天狗党の乱が発生している。最初は、村を戦火から守ると言うだけで自警団を組織したのであるが、七月二十九日、田中隊を攻撃して、竹槍でも多人数で向えば武士恐れるに足らず、の心理が村民の中に芽生えた。

元治年間、一般民衆から見たら天狗は盗賊の集団である。明治新政府の天下になつて、天狗党の評価が一変してから、一老人曰く、あの時の天狗はそんなに偉かつたのけ、私は火付、強盗の集団だと思つていたと語っている。

水戸家三十五万石の菩提所である、瓜連町常福寺の、「寺務日誌」を拝観させてもらうと、今でも、元治元年十月二十三日当御山へ、賊徒兵、砲発して乱入仕り」と記されている。

又常陸大子町、永源寺、墓地内にある、黒崎家の堂々たる石碑の碑文に曰く、明治十八年と年号が明記され。

「元治元年十月二十五日、流賊あり、まさに本邑を掠めんとする、君（黒崎友山）ここに郷人を卒いて、これを防ぐ、かたずして歿す。時に年四十三才にて、奸賊のために致命す」。

題額は、時の大蔵大臣、松方正義公爵

撰文は、帝国大学教授、内藤耻叟博士

考察すると、明治十八年までは、時の伊藤博文内閣や、最高權威ある東大も、ひとしく天狗党を賊扱いにして勤皇も、尊皇も全つたく無関係だったことを証明している。

まして鯉淵村周囲の農民は、天狗党は賊であると思うのは当然である。

鯉淵農民にとつて、天狗のとなえる、「皇統連綿」、「赫々たる神州」、と言つたところで、明日の生活に希望がもてるわけでもないし、腹がふくれるわけでもない、一部、天狗党の挙兵には反幕的内容がもたれ、一般民衆に世直し、の期待を抱かせたと見る方もある様ですが、私は民衆の期待と離反した争乱であると思う。

名戦術家であり、猛将でもある諸生党主、市川三左エ門が鯉淵農兵を見逃すはずはなく、意識のおくれた農民は宣伝にとらわれやすい。

鯉淵勢勇戦の話に、市川三左衛門は代表者を水戸城中に呼んで厚く労をねぎらい、今後の奸賊追討の奉公を期待した、封建時代、代表と言ひ、一同を城中に招じ、家老三左衛門直々の拜謁、一同の感激この上なしだったでしょう。拝領の赤繻絆、萌黄繻絆を着て一同鯉淵村に帰り、知遇にこたえるべく天狗退治に戦意を燃やしたのは当然でしょう。

最初は鯉淵村の自衛、次は知遇にこたえる意識が鯉淵勢の戦意の根原となつた。

鯉淵村自衛の農民が、意識を飛躍して、「賊徒討伐」を決議して、天狗党に敵対する行動にでたことは、時の権力者、諸生がわに立つての行動だから、挙村的まつまりが容易であつたことも事実だろうと、前記二年前の村方騒動の組織とエネルギーが農兵隊の出現となつたとも考えられる。

当時の農村の制度の打破する様な意識で出現したのでなく、自分達の昇格的な意欲で行動し

た、鯉淵農兵隊は、日々の生活の基盤に立つて行動した百姓一撥とは異なつた見方をしなければなるまいと思う。

見方を変えれば、結局農民としての目標を失ない、諸生市川一派に、たくみにあやつられて得るものは何もなかつた。

湊の天狗党西上に伴ない、水戸藩にも、つかの間の平和が訪れた。

十一月、戦が終つて鯉淵勢は、水戸藩は必要がなくなつた、藩校、弘道館に一同招待され、永きに渡る苦勞を諸生政権より、ねぎらわれて、鯉淵村に帰された、解散式である。

鯉淵村に帰つた農民に何が残つたか、寄合の席などで数々の合戦の自慢話であり、拝領品の子孫への引継ぎだけである。

明治新政府になつて、武田耕雲斎の孫、武田金二郎、敦賀で年少なる故に処刑を免かれ、若狭の小浜に四年間の囚人生活の後、許されて水戸に帰り、当時の恨を晴らすべく、諸生派の人を暗殺した事件が発生しているが、鯉淵村の方まで被害が及ばなかつたのは幸いである。

波山分離隊終焉の地

(一) 常洲西茨城郡羽衣村及び七会村・高田山

元治元年九月二日、鹿島神宮の森に続々と集結した筑波勢の一部が幕府追討軍麻生、小見川、棚倉藩兵に九月五日に攻撃されて広々とした霞ヶ浦湖上を血に染め乍ら三三、五五、思い思いに常総の野に転戦して殆んど全滅して各地に天狗哀話を今に至る迄残していった。

七月九日下妻多宝院を夜襲して幕府連合軍を撃破した旺盛な土気から比較して波山分離隊の最後は何れをとつても悲惨である。

天狗党が一部隊を残して筑波の山を下山したのが七月二十四日と推察される。筑波の裏街道を抜けて府中にて各隊を収容し拳兵以前の基地である小川、玉造、潮来館に分散駐留したのが七月末日から八月上旬と思われる。

筑波下山の理由について、水戸野史によると、是より先き田丸稻之エ門議して曰く筑波は天嶮なりといえども冬期雪ふるときは人馬通行に便ならず當を西山に移すのも若かず、昌木晴雄等之をばみ困りて小川に定むるに決す。是日昌木晴雄、宇都宮左エ門、西岡邦之介兵をひきいて玉造に至り、千種太郎は穴戸に行きて兵をあつむ。

関東平野の南部に位置する筑波山で七月中に雪の心配はうなずけない、資料の中にすでに分

離分裂の芽生を読むことができる。

幕府大軍を迎えて戦うには天然の要害を具備している太田の西山を選んだとするならば、筑波を下山した時点で府中小川辺で無駄に日数を費すことなく全軍太田に向つて行動を起せなかつたか、あたり戦機を失なつて市川三左エ門等諸生党の後手後手と廻つていった、此の時期七月二十三日は市川隊は結城から笠間を経て水戸城に入城して政権を完全に手中に入れた、七月下旬太田地方には奥州二本松藩は出兵していなかつた。

二本松藩総督日野源太左エ門以下一千余人が幕命により出兵して太田塙町浄光寺に本陣を設置して太田防備の態勢が全つたく整つたのは九月一日である。

最も天狗党が太田の天嶮によつて幕府軍と一戦に及んだならば佐竹候の城下町であつた太田は那珂湊と同様灰じんと化していたろう。

天狗党の分裂は大別すると三回あると史家は言う、第一回の分離は六月六日大平山から筑波への帰途野洲栃木町に立寄つた田中原蔵一隊の軍用金及び武器徴奪の失敗により、藩主戸田忠行の陣屋を襲い市街に放火栃木全戸数を焼失させた、昭和初年頃の故老が田中原蔵の名前を言うとき悪党の張本人と言つた、今でも原蔵火事と栃木市の史料の中に残っている、此の外にも茨城県幕末史年表によると、六月二十三日、筑波山に集る浪士田中原蔵、其徒と共に土浦藩領真鍋宿を砲撃し民家を焼く、浪士の一隊また常陸国北条警備の土浦藩兵を襲撃し警史数名を捕え去る、二十六日土浦藩、原蔵寺の暴行を憤り、追討せんと議す、たまたま浪士ら原蔵等を除名し、罪を謝するに依り事止む、土浦藩領真鍋宿も放火焼失したのである。

天狗党の総師、田丸稻之衛門激怒して次の様を一札を全軍に布告した、自軍のみならず水戸

家の親藩である土藩藩に対して布告したと見ることが正しいと思う。

田中 原 蔵

右の者自己の進退致候のみならず所職以つての外宜しからず候に付三軍に入れ置かざる候様
仰付られ候条此段相達候

甲子七月三日

岩谷 敬一郎

竹内 百太郎

よくも悪くも思切つて暴れたものである、九月十八日那珂湊より助川城に入った田中隊は追討軍攻撃により助川城落城二十六日は入四間を通り八溝山に登つて天嶮を利用して起死回生を計つたが糧食無く食わざること三日遂に部隊を解散、自身真名畑村に於いて捕縛、十月十六日福島県塙町の下河原（久慈川）の刑場で斬首された、国道一一八号の久慈川の河原に田中原蔵処刑場跡の丈余の碑が特志家によつて建立されてある、地下の田中原蔵以つて冥すべし。

第二回の分裂は甲子七月下旬から八月の期間に発生した出身藩別のエデオロギーの相異による分離である、すでに水戸藩出身の隊士は家郷を跡にして半蔵、諸生党市川一派が水戸城を手中に収め、天狗出身の妻子、親類は禁固或いは投獄の苦しみに会っている、水戸と府中、小川は十里以内、悲報は一日とまたず天狗の耳に入ったことだろう、他藩出身の幹部が強調する水路銚子より横浜に行つて攘夷決行の前に一旦武力に訴えても水戸城に入城し奸賊市川一派を放逐して然る後に攘夷と考えたのも無理がないと思う。

一方他藩より参集した、川股、伊藤、林、西岡等は、吾々は水戸家の内争に決死の覚悟で肉

親を捨てて参加したのでない、一意攘夷断行の一念で水藩有志と筑波以来行を共にしたのである、須からく同志を伴なつて銚子に直行横浜襲撃の強行論が互にゆずらず遂に七月二十五日、藤田小五郎、岩谷敬一郎、飯田軍蔵を軍将として総勢五百余人水戸街道藤柄口より入城せんとしたが敗北となり、小川に退いた、後世の史家曰く、白夜堂々と間道ならばともかく正規の道路たる水戸街道を入城せんとした天狗党幹部の心意が判らぬと後日西上の途中、下仁田、和田峠の合戦に不利な条件で高崎藩、諏訪、高島藩兵を見事に撃破した、名戦術家山国兵部が参加していれば事態も異なつた戦斗になつていたろうが、

第三の分裂は十月二十二日那珂湊に於いて孤軍良く幕府大軍を相手に善戦三ヶ月共同戦線を張つて戦つた大発勢神原新左衛門等一千余人の幕軍への投降である、元々主義主張の異なる大発勢が那珂湊で筑波勢と共同戦線を張れたのは両方に市川憎しの一念が内臓していたからである。

降伏の条件に曰く帰順せば処するに寛典を以つてせんと約束だが、降伏した宍戸藩主松平大炊頭さえ切腹せしめた幕軍総括田沼意尊である、神原等大発勢一行には冷酷のみが待つていた、古河、佐倉藩に預けられ悲惨な取扱後慶応元年四月五日、古河藩の刑場で処刑されている。思うほ天狗争乱の中で分離派も最後は悲惨であるが、降服した者も前記大発勢の如く悲惨である、最も水戸家の親藩、宍戸一万石の殿様、松平頼徳でさえも歴史の激流にまき込まれると切腹させられるのだから、残つた天狗西上軍として生を全うすることはできなかつた加賀藩に投降し大部分の人々が敦賀の刑場の土と消え、又つかの間の勝利を得た諸生党の人々も会津で越後で弘道館で、最後には下総八日市場で全滅するのだから、特に市川三左エ門は明治二年二月

二十六日江戸青山百人町某家に潜伏しているのを水戸の捕史に見えされ、水戸に護送され吉田刑場に於いて生きながら逆隣にされている。

天狗、諸生何れを是とし非とするかは識者の判断にまつとして水戸幕末の争乱を研究してみるとただ空しい一言につきる。

私考すると鹿島に屯集した波山分離隊には一軍の將たるべき統卒者が無く烏合の集団化の様相が見られる、資料により計算すると総数五六百人は布陣していた、何れも筑波に於いて幕軍と一戦を交え、土氣も軍備も或程度は装備されている武装集団である、それが九月二日の幕府追討軍を相手に交戦することもなく神宮の森から大船津に移動して雲散夢消の如く散乱してしまつたとしたか私は思ひ様がない、以後の彼等の行動についても到る所で農民或いは府中、土浦藩兵に追われて各地に天狗塚を築いていつた。

晩秋の一日、鹿島屯集の七番隊長、羽前松嶺藩出身（現山形県松嶺町）川俣茂七郎最後の地現笠間市羽衣の部落を車を馳つて尋ねてみた。

私の住んでいる勝田市から羽衣の部落を訪れるには那珂町で太田街道を横断国道一一八号線に入り北上して瓜連の十字路で左折して静神社の前を抜けて下江戸で那珂川の千代橋を渡り、国道一二三号線のT字路を左折、カーブの多い手はい坂を上つて常北町に入り、常北一笠間間の県道に右折する、古内、仲郷附近は茶の産地平和な農村で秋の気配が濃厚である常北から約四十分で現笠間市大橋に到着するT字路を右折すれば道路沿いに羽衣の部落を抜けて七会村小勝方面に抜ける。

T字路右山上に大橋村鎮守の吉田神社が見える、急階段を上つて社前に立つと現在でも杉の

大樹が林立して百余年前の豪雨の中、川俣茂七郎一隊の九月八日の部隊解散劇的狀況が再現する様な錯覚におちいる。

九月五日殿軍を引受けて鹿島大船津を撤退府中、太田切、杉崎、池野辺から朝房山附近を追われてやつと大橋に到着、常野国境を何とか越えて野洲に入つて再挙を計る目的で大橋の部落に入つたがすでに村々には天狗が来たと半鐘が乱打され駐屯の幕軍が押寄せることは時間の問題である。

社前で部隊解散を宣言、軍用金を各自に分配、自由行動をとらせたが部隊を離れば目前に死が迫っている、激しい雨の中一行数十人は羽衣の部隊に入った、川俣茂七郎は無人の同村石井嘉平宅に入り軒下に十数本の抜身の槍を立掛けて示威を張りて善後策を講じ三三五、野洲国境に向つて散つて行きその中に高田山で自刃した伊藤益荒、伊藤齊が含まれていた。

一人石井宅に残つた川俣は、おのれの槍に

みちのくの木の間がくれの山桜

ちりてぞ人やだれと知るらん

の一首を結びつけ遙か西皇居を拜し割腹、血の中に自分の体が落ちていつた、とき元治元年九月八日、年令二十六

注、前記大橋村郷土森家の息子、森貞次郎は天狗党に加盟西上軍に加わり敦賀で処刑されている、拳兵以来の同志の故郷を目標に行けば或いは野洲脱出の便宜を期待したのでらうか「水戸の天狗に逆らふ奴は出らば出て見らぶつ殺す」、筑波の天険によって号令をかけている間は天狗の声鳴は八洲の草木もなびく程だったが、一度山から降り分散離合した天狗は拳兵以

来の押借り、放火、暴行がたたつて、一人の天狗を五百、六百の百姓が竹槍で追い廻し捕られて虫けらの如く殺されて原野に捨てられ天狗塚を築えていった。

天狗騒ぎの著者、横瀬夜羽曰く

川俣茂七郎の碑文立派に書いてあるが事實は波勞困ばいのあげく土兵に囲まれて酷たらしく殺されたのが真相である、と

羽衣の部落の姓に森、割貝、川又等の多いの目につく、当時の石井嘉平宅は何処か老婆に尋ねたが判らなかつた、又知つていても故意に教えなかつたのか川俣茂七郎の墓は道路の中段に有るがむしろ道路脇の丈余の碑が立派である、山形の故郷の子孫が建立したのだろう。

逃亡する天狗が大金を持ち歩いては危険なので各自目標になり易い木の下、石の下に埋めて行くのを天狗が来たので皆山に逃げて行つたが中風の老人は歩けないので納屋にかくれてふるをていて、天狗が金を埋める場所を見ていて後日堀り起してその家は大尽になつたので今でも天狗大尽と呼んでいると言うことをきいたが改まつて老婆に尋ねるわけにはゆかなかつた。

帰路道路脇の商店に寄りジュースを飲み乍ら種々雑談の中で最初は警戒していたが、私が住所と名前を言つたら安心して老人曰く親から伝わつた話だが明治の中頃東京の人が羽衣の部落を尋ね近辺を散策して埋めた金を探したが判らなかつたと言う。

又羽衣の部落で松原講と言う講中があり年に何回か老人達が集会して念仏を唱えて故人の冥福を祈つている様だが、天狗の冥福か何うか調査しようと思つて羽衣出身の知人の中学校の教師に問合せたら是非御来駕を乞うと連絡があつたが、勤めのある身今だに実現できない。

高田山

当日一旦羽衣から大橋に戻つて元の道路を仲郷迄戻り左折して茂木街道を西南に向う、立派な道路が完成して昔から不便の代名詞の様な七会村の観念を一掃される。

小勝の十字路脇のガソリンスタンドで高田山の場所をきく、高田山の場所はすぐ判つて親切に教えてくれたが何んで附近の人しか知らぬ高田山に勝田の方から訪れるのか不思議な様子である、丁度居合せた給油に来た農家の人が、此の間百年祭と言つて御祭りした碑を見に行くのですかと言う。

話しにきくと高田山で自刃した二人の武士が今年で丁度百拾貳年になるので地元の某氏が鳥居を寄附して神官を呼んで供養したと言う。

場所によつては埋もれて草木が繁茂して所在が困難な天狗の墓もあれば、きれいに清掃されて手向の花が生けてある墓もある、誠に世は様々である。厚くスタンドの御客に礼を言つて一路高田山に向う。

笠間に向つて小勝の部落を抜けて小路を左折すれば目の前が高田山である、車を道路脇に駐車して徒歩で頂上に行く山と言うより丘と言つた方が正しいと思う、山道を道路沿いに登つてゆくと中腹に臼木の木の香も新しい鳥居が見える。

中段に丸形の碑石が見える、

伊 藤 益 荒

両君

伊藤 齊

元治元年九月九日自殺勇士村中

奉祭祀伊藤益荒兩命第壹百拾貳年追悼慰靈祭
齊宮

羽衣の川俣茂七郎の碑から比較すると見劣りがする、前記川俣隊から別れたのが九月八日、丸一日野洲に出ると不案内の地を必死に訪廻して捕史に追詰められて高田山に登ったのだろう。じせいに、春雨の身の覆う可き方もなく今は笠間の露と消ゆらん。

高田山の山上から小勝の部落が一望に見透せる、部落の半鍾のやぐらが高々と建っている、時雨の中天狗来ると、あの半鍾が狂った様に鳴ったことだろう。

地面に目をやると私の地方では最近めつきり少なくなつた薬草（にがとう薬）が至る処に生えている、秋の短かい太陽が西山に消えてゆくのを気にし乍ら両手一パイに採集した。

小勝の部落と半鍾が何処迄も記憶に残る今回の調査行であつた。

波山分離隊終焉の地

(二) 常洲酒丸村安楽寺・栗原台天狗塚

時、昭和五十一年八月十二日、現豊里町酒丸に在る天狗党分離派の宇都宮左衛門、林庄七郎の墓を調査を兼ねて自分の目で確かめ度く、小閑を得たので車で十時に出発する。幸いに私の職場で働いている若い新妻君も興味があつて同行する。

現代は車の異常な普及に伴なつて道路もバイパスが多く陸前浜街道も昔の面影が残っていない、百年前に神勢館が提防になつて橋が完成しよう等とは夢想もしなかつたろう。

昔の水戸街道の要所長岡の坂迄愛車は一足飛びに行く正に現代は目的地迄何キロあるでなく何時間で到着できるかである。

安政六年十二月、戌午の密勅の不返論者が旅宿恵比寿屋を本拠として水戸、江戸間の通行人を改めて勅諭の江戸持出しを阻止したと言うが、長岡宿の台上から街道を警戒すれば上り下りの通行人は一望に眺められる。

奥野谷の十字路を直進して次のY字路で左折すれば小川、玉造方面の道路である、昔水戸城下から藩校小川、玉造館への道路は恐らくこの道路を利用したことでしょう。幾分出発しては竹原の宿通り左折すれば竹原中郷の永福寺甲子八月三十一日天狗党の一員が宿陣していたが果して何隊か。

府中石岡は昔水戸街道の宿場町だが現在はバイパスが完成されて、一路恋瀬川に出てしまふ右に筑波の男体女体の連山が初秋の関東平野に美しく映える、余談ですが那珂湊を出発して長征の途についた天狗党一千余人が上州路に入り一步一步故郷を跡にして未知の土地に入つても遙か彼方に筑波の山が見える時は必強かつたが、上州の山々にさいぎられて筑波山が視界から消えた時は急に一ツの心の支えを失なつた様であると長征日誌に記してあるのもうなずける。

稲吉、中貫、真鍋何れも幕末天狗党争乱の地である。

甲子六月二十一日、神郡普門寺に駐留していた天狗党の中でも過激派集団である田中隊が真鍋・中貫の宿場に火を付けて暴行略奪して被害を受けた宿場である。

私が考察するに、土浦藩、土屋寅直、九万五千石の藩は水戸藩とは代々親籍関係にあり、幕命による天狗追討には筑波拳兵以来消極的にならざるを得なかつたのではなからうか。

天狗の主張する尊皇攘夷に藩士の中には共鳴者も居たろうし、又党幹部の中には藩士と面識者も多数居たことであろう。

茨城県幕末史年表に、元治元年、七月二十九日、幕府、土浦藩の領内浮浪取締りの緩かなるを責め重ねて討代を致命す、と記入されている。かかる事情が介在しているから土浦藩士の捕虜と天狗の捕虜が幹部の話し合いで交換できたことが資料に散見できる。

六号国道を土浦市内に入る手前で右折して筑波街道に入る、二十年前にバイクで通つた頃とは一変して住居が密集して道路が整備されて正に時代の流れを感じる。

波山分離隊の一行は勿論警戒厳重な中貫稲吉はさけて府中で一戦の後間道を抜けて谷田部方面に移動して行つたと思われる、部隊と言うより、戦斗能力を失つた逃亡兵である。

地図を頼りに藤沢の十文字を左折する、県南の穀倉地帯、桜川の流域見渡す限りの稲田である。バス停留所の標識に田土部の地名が見えたので栗原の所在を聞く田舎の人は親切だ。天狗塚の所在を教えてくれる。道路は整備されているがせまく大型車の通行が多く交換する度にヒヤッとする、栗原の台地に着いて折良く居合わせたバイクの老人に天狗塚の所在を尋ねる、親切にバイクで先導してくれる。やつと尋ねた天狗塚は私が想像したのと異つて個人の庭先の一角に立派な慰霊碑があつた。筑波街道を左折して此処に来る途中が、土浦志筑藩兵、土民に追われて分離隊の全滅した地である。当のない泥沼の逃亡者によつてたかつて捕殺したのが真相であろう。

最も筑波山に登つて威を張っている時は押借、暴行、人足の割当等、此の附近の住民は極度の迷惑をうけているから天狗狩に積極的に参加したことは次の布告でうなずける。

「天狗打取候は、身に附候品々被下之」

落目になつて三三、五五、山林、山合を逃亡する天狗を竹槍で追い廻すのも精がでたことだらう。

碑の正面、南無妙法蓮華經、天狗党殉国烈士之墓

右面 故大野庫之充の発願により筑波勢別動隊、隊長宇都宮左エ門他十八烈士百年祭慰霊之為也。

左面 経目、每自作是念、以何令衆生、得入無上道、速成就仏身

裏面 元年元年九月九日此地陣歿、昭和三十九年、十一月二十五日建立

天狗塚保在同志会代表、宮本公道他有志一同。

台上から桜川流域を見渡せば広々とした関東平野、北に筑波が雄大にそびえている、つわもの共の夢の跡、惨話限りない、栗原地帯は平和な農村である。

屋敷の主婦の談話では九日の命日には香華の花を供いて冥福を祈っている由、私が尋ねた当日も新らしい花が供えてあった、雄図空しく悲惨な最後を当地で閉じた宇都宮左衛門以下十八名の烈士も以って冥すべし、私は厚く主婦に礼を述べて、学園都市の影響か気持良く整備された道路を一路豊里町安楽寺に向う。

豊里町に入つて土地の人に訪ねてやつと寺の所在が判明する、酒丸地内に入つて左折して、三〇〇米位農道を入つて周囲が畑の中に墓地が見えてくる、現在は道路が整備されて新築住宅が点在するが幕末当時は辺境の農村地帯であつたろう。

真言宗^{地之}山派、青竜山安楽寺の山門を入つて住職に会つて来訪の目的を説明する。世に好事家は多いものか、最近は同じような目的で訪れる客が見えるとのこと。

川瀬教文書、波山始末に曰く。

九月八日先きに鹿島の陥るや西岡邦之分等五六十人のがれ去りて府中に到り市中百六十戸を焼き藩兵と戦つて之れに勝ち十数人を殺傷す、時に石川平助等之れに死す遂に南の方に行き土浦藩兵と田土部にて合戦す利あらずして衆徒退却し桜川を渡る藩兵追撃する、甚だ急なり衆徒再び敗北して栗原台に於て戦死する者十一人余、宇都宮左衛門、林庄七郎、石橋民右衛門は走りて酒丸村安楽寺に入りて自殺す、全衆皆潰散す、舟越六郎左衛門、横山吉太郎は土民の爲めに捕われ、中沢紋載は志筑藩兵に殺害せられ、山田四郎右衛門は土浦領内稲田新田に到亦土兵の爲めに捕殺され、と記されている。

敗走につぐ敗走、明治維新になつて天狗派の作者でも府中に於いての合戦は分離隊の勝利となつてゐる。

栗原台の天狗塚の碑文には十八名、波山始末には十一名となつてゐるが処刑された者を一ヶ所に埋葬して十八名となつたのか？

郷土の生んだ民謡詩人でもあり郷土史家でもある横瀬夜雨の名著、天狗騒ぎに、家の記として左記の一文がある。

十四日筑波天王院むこの話、同人事安楽寺隣、山中と申す油屋に細工致居候処安楽寺境内、裏の笹山にて緋毛せん敷二人自害、一人は宇都宮左衛門、傍に肩先鉄砲受候者一人居り候を生捕斬首、其の傍に大小一腰、金子廿両有之

住職の話によると当時の寺は現在の場所より南側に位置して裏は寺領にて山林になつてゐた様です。自殺したのは碑文から判断すると、林庄七郎、と史料から推察すると熊谷彦四郎か又熊谷誠一郎が今となつては実証する正確な資料は期待できないでしょう。一考

墓碑に、盛州藩、林庄七郎碑とあり、側面に元治元年子年九月九日 熊谷力之介

明治十九年旧三月二十一日

願主 久松金右エ門建立

鷺沼善八

願主の久松と音う方は土地の名主で自殺した兩名をあわれんで特志家の寺附を集めて墓石を建立した様です。林庄七郎は鹿島に集合以前に負傷して歩行ができず屈強な者に駕にてかつが

れて転戦した様だから熊谷、鷲沼は従者でもあろうか大正の始め頃まで林庄七郎の遺言状が前記久松家にあつたそうだが、現在は散逸して何も残っていないそうです。

墓石も墓地の改葬の度に移転して現在は道路脇のはずれに建っている、任職に厚く礼を述べ最後の目的地、飯沼の弘経寺に車を向ける。

現今将門ブームで観光客のにぎわう石下を抜けて国道二九四号線に入る、鬼怒川の提防に沿って中妻地内で右折鬼怒川を渡り、折よく交通整理の警官が居たので同行の新妻君に尋ねさせる、長髪、ジーンズスタイルの若者が処もあるうに御寺の所在を尋ねたので一寸警官も不思議な態度で曰く、千姫の墓でも見に行くのかねと丁寧に教えてくれる。

県道からせまい道に入つて行くと、天樹院千姫の菩提所である弘経寺の山門が見える。

老樹がうつそうとそびえて、屋根瓦の三ッ葉葵の徳川家の紋所が目につき格式の高い寺であることが判る、任職に面会したかつたが相憎法要があつて留守とのこと。

右側に天樹院の墓地が見える、講談、浪曲の吉田御殿は有名だが真実は相当異なっていることでしょう、戦国の悲劇の女性には変りはあるまいが、同行の新妻君が周囲の墓石に刻んである赤い文字の意味を私に聞く。

川柳にある、あらし不思議赤い信女が又はらみ、の句を引用して説明する。

夜雨の天狗騒ぎ、弘経寺の項を要約すると、

九日、五時前、西岡、水野、永野、大山、外数名、当山弘経寺に参り、府中にて合戦、敗走に及び、ようよう是迄辿りついたが何分疲労はげしく、又共の中に深手を負っている者もあるので一日休息させてくれるよう頼んだが、此の度土浦藩よりきびしく布告が参り一旦は断つた

が仏に仕える者として、あまりにも哀れになつて朝飯をたべさせ、休息の儀は固く断つた処、一行は引上げたが、一人河内三郎と申す者が重傷で歩行できず、落髪当山の弟子となつて養生させてくれるよう、泣いて頼んだが再三の願いもきき入れられず自分で落髪して、観音經一部、古衣一枚、珠数並びに単物一枚無理に頼んで申受け、九時過ぎ深手を負つて歩行がやつとの体で俄坊主になつて山門を振り返り振り返り去つて行つた状況が記されている。

当時の幕府、令を関東八州、陸奥一般に発して曰く、いやしきも異装する浮浪の者あれば直ちに捕獲すべく、若しこれを隠とくする者は厳料に処すべき旨を達したり。

前記布告から史料には発見できないが無事逃れて明治維新を迎えたとは考えられない。

今も天狗の松、天狗の岩、天狗平等の地名が残っているのは後世に何を教え、何を言わんとしているか。

帰路は新装された学園道路を直線に土浦に抜け六号に入つて家路に着いた。

一、音 読 参 考

阿弥陀寺	あみだてら
押借	おしがり
鴨居	かもい
青柳	あおやぎ
土木内	どぎうち
面付	めんつけ
叢沢	そうたく
其砌	そのみぎり
旁々	かたがた
雖	いえども
森	もりつけ
部野	へたの
鎮無	ちんぶ
土師	はじ
掠すむ	か(すむ)

本 邑	ほんむら
赫	かくかく
終馬	しゅうえん
雲散夢消	うんさんむしょう
恵比寿屋	えびすや
志 筑	しづく
潰 散	くわいさん
弘経寺	ぐぎょうじ
落 髮	らくはつ

昭和五十二年二月第一版発行
 昭和五十二年五月第二版発行
 昭和五十二年九月第三版発行
 昭和五十二年十二月第四版発行
 昭和六十年五月第五版発行

天狗争乱の傷痕

限定品
 非売品

勝田市稲田八一五十二

著者 稲田 秀 男

印刷所 かわあひ印刷所